東光独言

今東光

角川書店

昭和35年12月30日初版発行
昭和36年2月10日再版発行

東光独言　　180円

著作者　今東光（こんとうこう）

発行者　角川源義

東京都千代田区富士見町2

発行所　株式会社　角川書店（かどかわしょてん）

振替口座東京195208

中光印刷・宮田製本

落丁・乱丁本は交換します

目次

ノートの一節から　七
音楽について　一三
男と女　一七
就職戦線　二三
河内カルメン　二七
恩師　三二
逆縁　三七
役者根性　四三
立小便無用　四七

食生活　五三
違反と妨害　五七
有　閑　六三
同性愛　六七
私生児　七三
良　識　七七
パトリオチスム　八三
狭き門　八七
民主主義　九三
欲望のばけもの　九七
うりもの　一〇三
電　化　一〇七
露出症　一一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

日中問題　二七
内紛　二三
道路　二七
青い人間　三三
朗報　三七
暴徒　四二
浮世　四六
民謡　五一
馬鹿野郎　五六
答弁　六〇
スパイ　六五
血みどろの町　六九
歌ごえ　七四

世相片々　一七九
八尾市　一八四
おかしな話　一八八
女の立場　一九三
空前絶後　一九七
証人　二〇一
あとがき　二〇六

東光独言

ノートの一節から

僕は近頃、河内の人楠正成の小説を書いているが、河内の一角に住み、朝夕に河内を観察し、時としては取材をかねて河内野を歩き回っていると、今までに書かれなかったもの、あるいは書けなかった点を拾うことができるのであった。

新秋の千早城に汗をたらして登った。秋晴れの金剛山中腹で河内の風光を賞しながら弁当をつかっていると、身はまさに歴史の中にとけこんで現代を忘却しているのであった。多くの人は赤坂、千早の旧蹟には杖を曳くが、楠公の築いた諸塞までは土地の人の案内でもないとほとんど見るすべがないのだ。幸にして僕は近くなので折に触れ時に応じて歩けるので仔細に調査することができた。

「太平記」を見ると

「このころ安野中将公廉の女（廉子）に、三位殿の局と申しける女房、中宮（後西園寺太政大臣実兼公の御女）の御方に候はれけるを、君、ひとたび御覧ぜられて、他に異なる御おぼえあり。三千の寵愛、一身にありしかば六宮の粉黛は顔色なきがごとくなり。すべて三夫人九嬪、二十七世婦、八十一

女御、および後宮の美人、楽府の妓女といへども、天子顧眄の御心をつけられず。ただ珠艶尤態のひとり能く是を致すのみにあらず、蓋し善巧便佞、叡旨に先立ちて奇を争ひしかば、花の下の春の遊び、月の前秋の宴にも駕すれば輦を共にし、幸すれば席を専にしたまふ。これより君王、朝政をし給はず、忽ちに准后の宣旨（新待賢門院）を下されしかば、人みな皇后元妃の思ひをなせり」

と書いている。後醍醐帝はこの新待賢門院を熱愛し給うたので、御前の評定、あるいは雑訴の御沙汰までも、この美人の御口添えがあったと唇を反らして非難されたのであった。

多くの場合、華やかな宮廷の恋愛として帝と門院の御仲を語り伝えるに過ぎないこの個所も、仔細に調べてみると御寵愛は単に翠帳紅閨にのみとどまらないのだ。御愛しになる御方には、それだけの物質的な御贈与もしておられたのであろう。

そもそも後宇多院の御領のうち、河内にあるものは高向庄、一志賀庄などがあった。この後宇多院の御領は昭慶門院（亀山院の皇女にして後宇多院の皇族）の御領になったが、やがて間もなく後醍醐天皇の御領となったのである。その後、高向庄は後醍醐帝の御孫女、すなわち後村上天皇の皇女であられる新宣陽門院の御領に帰したと伝えられる。後亀山天皇の元中三年十二月、新宣陽門院の令旨によって、高向庄の領家職たる年貢の内にて毎年千疋を新待賢門院の御菩提の護摩供料として河内の観心寺へ寄進されたことが観心寺文書によって知られるのであるが、後村上天皇の御母后として正平十四年に崩御される以前、帝の御贈与になった御領ではなかったか。

かつての八条院御領のように皇妃の御領というものが意外に少くないのは、御寵愛が増さるにつけて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

御領も多く賜わったと見るべきであろう。ましてや南北両朝の迭立の際などには、御寵愛の皇妃に御領を付されておくことは後顧の憂いをなからしめる点でも肝心なことだったと思われる。

僕等にしたところで愛する女ができたら、なにがしのことをしてやりたいと思うのは当り前の話だ。与えても与えても惜しみなく与え得るのは愛情と物品かもしれない。

しかしながら当節の女は、金品の贈与がなければ愛情もまた無いものだと思っているらしい。愛情の裏付けとしての金品はわかるが、愛情の反対給付として金品を考えてもらっちゃはなはだ迷惑千万だ。

ところが僕の知っているある女の愛人は、気違いのようにその女を愛しながら、金品の問題となると目の色を変えて惜しむのだそうだ。こんな根性は僕にはわからない。ケチな野郎を恋人に持ったら女はたまったものではないのだ。しかも不思議なことにケチな奴ほど嫉妬深く助平ときているから困ったものである。

この男女が道頓堀へ映画を見に行って、その帰途、女が夜の御飯の支度をするのが面倒臭かったので簡単に食事をしましょうと言ったら、とたんに不機嫌になり、一緒に大衆食堂に入って、女がトンカツとライスカレーを注文したら、三百円支払った男は

「わいは帰る。お前だけ喰え。わいは家でぶぶ漬食べるさかい」

と言いおいて先に帰ってしまったそうだ。これでも恋人同志かと思うと、話を聞いた僕が涙がこぼれそうになった。丁稚から叩きあげて、けったいな会社の社長さんに出世して、その会社の事務員に月給を与えた代りに二号さんにして、人がましく愛人を持つところまでは現世出世男の体裁だけは整ったが、

根が丁稚根性のケチときているので女にトンカツやライスカレーを喰わせるさえ惜しいのだ。それくらいなら空気だけ吸って生きているような女を探せば好いのに、人並みに生きている女を持つから、洋服が要るだの、靴を買ったというと、そのたびに肝を冷やし、そのたびに腹を立て、そのたびに銭がかかると泣き言をいい暮らすのだから哀れというよりほかはないのだ。それでも女体の悲しさに、いったん、こんな男でも男として持つと、二号さんのくせに爪に灯をともすほどつつましく暮らし、便所の落し紙もごわごわした新聞紙で我慢するほどにして朝夕を通らなければならないとは、ただ因果というよりしようがないのであろうか。

ひどい奴になると僕の住んでいる八尾市の市会議員のある奴などは、破産寸前に追い込まれながら、二言目には

「小金持ってる後家おらへんか」

と口癖にしているのだ。此奴は小金のありそうな後家をたらし込むのを専門とし、その小金をまきあげようというのだ。たった一度だけ小金を持ってる後家を口説き落した成功の味を忘れかね、卑しい種豚みたいにひろがった鼻の穴をひこつかせては後家の匂いを嗅ぎ回っているのだ。こんな奴が他人名義の家を売り飛ばしたり、河川の上に無法に家を建築して売り払ったり、ほとんど社会人として生きる資格ない野郎が、市会議員だなどと髭を生やしてのさばり歩いているのだからお話にならない。わが住む八尾市からこんな奴等を追っ払わない限り、明朗で健全な市政なども期待されないのである。不思議と田舎政治家に限って妾宅を構え、白昼から酒気を帯びて、人もまた怪しまないことを好いことにしてふ

んぞり返っているが、こんな奴等に税金を使われているのかと思うと腹を立てずにはいられないのである。

後醍醐天皇が三位殿の局を御寵愛になったことを僕は帝徳を傷つけるものと言っているのではない。当時にあって皇妃を何人持たれようと道徳的には非難される問題はなかったからだ。けれどもしいささか帝徳を損じたとするなれば「太平記」の筆者をして

「上卿も忠なきに賞を与へ、奉行も理あるを非とせり」

と書かずにいられなかった准后の御口入を容れさせられたという事だ。如何なる明君といえども女性には案外、脆いものなのである。

音楽について

僕が「裸の恋人」という小説を書いて、音楽家の生い立ちからはじめ、多少、音楽について書きはじめると、僕の知人等は目を丸くして驚き、どうして僕が西洋音楽について若干の知識を有するかにあきれたのである。

ところが僕の方でかえってあきれたのだ。坊主で小説家などというのは風変りだと思って、オタマジャクシの西洋音譜は皆目、ちんぷんかんぷんだろうと決めているのがおかしいのだ。

僕の生い立ちの頃は家庭がクリスト教的な雰囲気に包まれていたし、ミッションスクールの関西学院中学部に入学して、グリークラブの会員だったのだ。その頃のグリークラブはごく少数のメンバーで、毎週一回、チャペルで音楽会をやった。誰も聞きに来る人もない時もあれば、数十人の聴衆が集る日もあった。歌を歌うということは歌う本人が幸福なのであって、次に聴く人が幸だという順序だということを知ったのも、このグリークラブの部員になったおかげだった。どうして人間は、たった一人でも歌うかということを考えたら、この理由がわかるだろう。まして数人あるいは数十人で合唱することは限りなく悦ばしいものだ。

関西学院の先輩に山田耕筰さんが居る。僕は直接、彼によって音楽を教えられはしなかったが、間接には非常な影響を受けたのだ。この百年に一人しか出ないような天才を見ていることは、僕にとってどれほどの栄養であったか知れないのである。

山田耕筰の音楽における業績を今さら喋々するまでもないのだ。しかしながら彼の名を普遍的なものにしたのは何といっても彼の一種独特なリート（Lied）であろう。それはあくまで日本的であり、東洋の伝統につながるものだ。

ここで思い起して頂きたいのはハインリッヒ・アルベルトによって創始されたと言われるリートは、永い間、多くの音楽史家に無視されたか、関心を持たれなかった。音楽史家に言わせるとグルックやハイドンやモーツァルトさえ、これに対して注意を払った形跡はなかったと言われているのだ。わずかに偉大なるベートーベンのみがロマン派の歌曲について、ある予告をしているに過ぎなかった。

しかるにシューベルトが現われるに及んで、このリートなる芸術は一躍、檜舞台に上らされ、ついにシューマンによって完全な形にまで更新されたと伝えられている。

なぜそうであったか。

彼等は中世紀から伝わる民謡風の野卑な歌詞を排撃し、当時の偉大なる詩宗ゲーテであるとか、シラーであるとか、ハイネであるとかの詩集から自由に歌詞を選択したのだ。これが大切な点である。

ただ美しいメロディだけが存在するものではない。

そのメロディを美しい詩で飾るところにリートのリートたる所以があるのだ。

幸にして山田耕筰が作曲活動をしている頃、不世出と言われた詩人北原白秋が存在した。この白秋の詩に山田耕筰は魂を揺り動かすような繊細可憐なメロディを添えたのである。その点は山田耕筰は適切な詩人を得ると共に、詩人白秋はまた幸運にも稀代の作曲家と結ばれたのであった。

白秋という詩人は永遠に童心を失わなかった人だ。小田原市の十字町に書斎を移された谷崎潤一郎先生の家に、のんべんだらりと居候をきめ込んでいた僕は、小説を書くでもなし、絵を描くでもなし、毎日、御幸ヶ浜に行っては相模灘の怒濤と取っ組んで沸々とたぎるエネルギーを消耗していた。ある日、谷崎先生と二人で山の方に散策に行き、有名な白秋の「みみずくの家」という奇妙な書斎に行った。今日、僕はみみずく和尚なんて渾名で呼ばれているが、みみずくの家に住んだ初代は北原白秋なのである。何たる奇縁であろうか。

白秋さんに言わせると、みみずくは大変に可愛い小禽だそうだ。それで家を新築するのにみみずくみたいにのっぺらぼうに建てた家に二つの円窓をつけて、外見はいかにもみみずくみたいな家に拵えたのだ。その部屋の襖に古経を貼り交ぜていたのがいまだに忘れられない。

そこで思いついて僕は帰って来ると、鮎子ちゃんの不用になった乳母車を物置から持ち出し、夕まぐれに酒匂川の近くまで行き、手頃な小さな地蔵を盗み出し、汗をかきながら持って帰り、今や小田原に入る手前まで来た時、巡査が追っかけて来て捕り、しょうがないからへらへら笑いをして

「ちょっと悪戯をやってみました」

と謝ったら、お目玉をさんざんくらって元の場所まで査公と共に行って返して来て、また空の乳母車

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton